

瀬戸内海を渡ったサヌカイト

調査：唐古・鍵遺跡 第34次調査

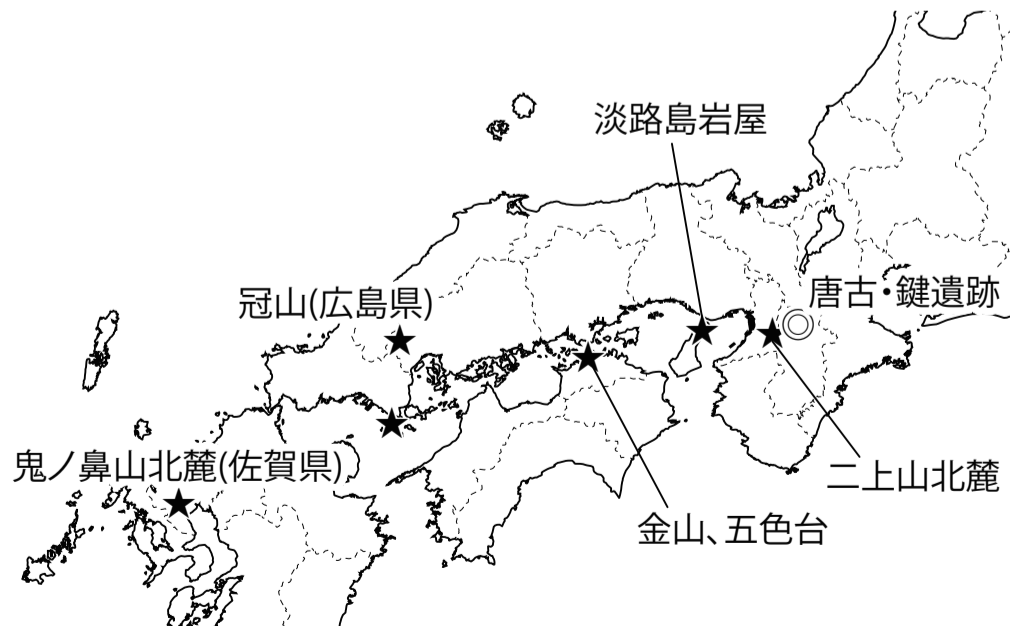
大きさ：長10.3cm、幅3.6cm、厚0.8cm

出土年：1988年

時代：弥生時代中期後葉

サヌカイト (sanukite) は、瀬戸内海地域の火山活動に伴って生成されたと考えられている安山岩あんざんがんの一種です。1885年に、ナウマン象やフォッサマグナの発見で知られる、お雇い外国人のナウマン (1854-1927、ドイツ) によって紹介され、1891年にヴァインシェンク (1865-1921、ドイツ) によって「サヌカイト」と名付けられました。たたくと高い金属音が鳴ることから、「カンカン石」や、主な産地である香川県にちなんで「讃岐石さぬきいし」とも呼ばれます。香川県では金山かなやまや五色台ごしきだい周辺 (坂出市)、近畿地方周辺では奈良県と大阪府の県境付近にそびえる二上山の北麓に産出することが知られています。

唐古・鍵遺跡から出土する打製石器だせいせっきの石材は、ほぼ二上山北麓産サヌカイトに限定されていますが、ごくわずかに香川県産サヌカイトも持ち込まれていたようです。展示している2本の打製石剣には、明確な色の違いがあります。黒色の方が二上山北麓産、灰白色の方が香川県産とみられます。灰白色の打製石剣は黒色のものよりも薄く作られ、縁辺部に集中して細かい打ち欠きをしているのに対し、黒色の打製石剣は断面がひし形になるように全体に細かい打ち欠きを繰り返しており、形態や製作方法の違いも見て取ることができます。



西日本の主要なサヌカイトの産地